

賛美歌『いつくしみ深き』の作詞年

城 俊 幸

序

『いつくしみ深き』という賛美歌がある。日本バプテスト連盟『新生讃美歌』（2011年）431番、日本基督教団『讃美歌』（1983年）312番、『讃美歌21』（1997年）493番、日本福音連盟『聖歌』（1986年）607番などである。これは、日本人にはなじみ深い。というのは、1910年に出版された文部省の唱歌『教科統合中学唱歌 第二集』の中に、この曲が取り入れられたからである。そこでは「星の界（ほしのよ）」というタイトルである¹。聞き慣れた曲ということで、日本では、葬儀でも結婚式でも入学式でも賛美歌ということこれが用いられる²。

賛美歌『いつくしみ深き』の原題は、「What a friend we have in Jesus.」である。作詞ジョセフ・スクライヴン（Joseph Medlicott Scriven）³、作曲チャールズ・コンヴァース（Charles Crozat Converse）⁴である。作曲家コンヴァースが、作者不詳のこの詞に感銘を受け、曲をつけて「いつくしみ深き」という賛美歌が完成したと言われている⁵。この賛美歌は、発表当初から、大きな人気をえながら、二十年近く、作詞者不詳、あるいは「作詞 H.Bonar」と表記さ

¹ 井上武士『日本唱歌全集』音楽之友社、1976年、183頁。また「別れの歌」（詞大和田建樹）として『歌曲集 初編』（1882年）にも所収されている。

² この詞の背景・意味を考慮すると、この賛美歌を結婚式や入学式で賛美することは、ふさわしくないと見える。以下にそのことを証明する。

³ Joseph Medlicott Scriven, 1819-1886.8.10, アイルランド出身。

⁴ Charles Crozat Converse, 1832.10.7-1918.10.18, アメリカ出身。

⁵ 大塚野百合『賛美歌・聖歌ものがたり』創元社、1996年、120頁。

れた。

では、この詞は、いったい誰によって・いつ・どのように作られたのか。なぜ、当初「作詞者不詳」だったのか。この賛美歌の背景を知れば知るほど、疑問が増える。

『讚美歌』（1983年）や『聖歌』（1986年）や『新生讚美歌』（2011年）では「作詞 1855年、作曲 1868年」と記載されている。だが、実は「作詞 1855年」とは、ウィリアム・レイノルズ（William J.Reynolds）の考えである⁶。作詞年については1850年説から1870年説まで諸説ある⁷。大塚野百合氏は「1860年」と推測している⁸。私も「作詞 1855年説」に異議を唱える。

そこで、この小論では『いつくしみ深き』の歌詞の作者の人物像を追い、その成立過程を考察することによって、その「作詞年」を特定し、さらに、この詞の本来の意味を明らかにすることに貢献できればと考える。ひいては、なぜこの賛美歌がポピュラーになったのかの理由を明らかにしたい。

方法論としては、人物史、詞の意味、楽譜の変遷という3つの側面から、それぞれの真相に迫り、それぞれの重なりあう事実から、一つの像（仮説）を提示したい。

⁶ William J.Reynolds, *Companion to Baptist Hymnal*, Broadman Press, Nashville, 1976, p.238. レイノルズは1855年の根拠として「母親を慰めるため」と書いているが、そこには2度目の悲劇のことも、母親の病気のことも言及がないため、信憑性に欠ける。さらに、レイノルズによると、サンキー（Ira D. Sankey）が見た楽譜集を *The Spirit Minstrel* (J.B.Packard, *Bela March*, 1857) だと考えているが、バックカードの *The Spirit Minstrel* の1856年版、1857年版、1860年版でもこの曲の掲載を確認できない。

⁷ Earnest K.Emurian, *Living Stories of Famous Hymns*, Baker Book House, 1955. エミューリアンも1855年説を採る。

T. M. マクネヤ、別所梅之助『改訂 讚美歌物語』警醒社、1938年、387頁には「原作は1850年に、既にかかれたものであるという」とある。

Kenneth W. Osbeck, *101 Hymn Stories*, Kregel, 1995, p.276. オスベックは「1857年に書かれた」としている。

The Sunday School Hymnary, Carey Bonner, The National Sunday School Union, London, 1938. (No.528) この楽譜では「作詞 1870年」とある。

⁸ 大塚野百合、前掲書、123頁。

1 人物史

まず、この賛美歌の詞を作ったジョセフ・スクライヴンに注目する。スクライヴンの人生を試作の年表A「スクライヴン人物史」で辿る。

スクライヴンは、1819年アイルランドで生まれ、トリニティーカレッジを卒業後、ミリタリーカレッジで学ぶ⁹。その間、ある女性と知り合い、婚約したが、結婚式の前日、その婚約者が池で溺れて、亡くなった。この出来事がその後の彼の人生を左右する。彼は絶望し、悲嘆にくれる。

翌年1844年、心の傷が少し癒えた頃、彼は新しい歩みを始めようとする。二十五歳、カナダのポートホープに移住し、教師になる。プリマス・ブレザレンのキリスト教派に属し、やもめを支援する活動を立ち上げ、隣人愛の奉仕に励み、やがて、町の人々から「良きサマリア人」というあだ名がつけられた¹⁰。婚約者の死を忘れ、悲しみを乗り越えようと苦しんだ日々でもあった。それでも心の癒しには、かなりの時がかかったと思われる。

四十一歳の時に、二十三歳の女性（エリザ・ローチ・キャサリン）と、恋をする。しかし、悲しいことに、この時も、この婚約者を結核で失う（1860年）。さすがに、信仰深い彼でも、神に恨みごとを言い、神を呪う日々もあったかもしれない。しかし、それでも、彼はイエスへの信仰を深めていく。このような信仰体験の積み重ねから生まれたのが、この詞である。

この賛美歌の素晴らしさは歌詞にある。「慈しみ深き、友なるイエスは、われらの弱さを知りて憐れむ」。イエス・キリストの愛の姿を「友なるイエス」と捉え、わかりやすく、実感をもって教えてくれる。それは、救い主イエスが、友として近くにおいて下さることである。自分の強さや能力で問題を解決し、救いに至るのではない。私たちの弱さを神は知っておられ、それゆえ、憐れみ、共

⁹ 佐藤裕『聖歌の友』聖公会出版、1986年、328頁「ダブリンのトリニティーカレッジで学び、1842年BA、さらにアディスコウム・ミリタリーカレッジで学んだ。」。

¹⁰ Jas. Cleland, *What a friend we have in Jesus and other hymns by Joseph Scriven*, Williamson Publisher, 1895, p.13.

にいてくださる。何度も絶望の淵に立たされたスクライヴンにとって、このような「友なるイエス」が、悲しい出来事の度に、心の深い慰めになったと思われる。

その後、最後まで独身を貫いた彼は、晩年、病気になり一人で生活ができなくなった。親友のサックヴィル家に長く間借りしていたので、サックヴィルが世話をしていたが、1886年六十七歳で亡くなる。

死後、サックヴィルが、スクライヴンの部屋にあった詞の草稿集を見つけ、出版するに至る¹¹。こうして、発表から二十年近くの時を経て、この詞がスクライヴンのものだと証明される。それまでは、作詞者不詳、誰が・いつ作ったのか知られていなかった。全くの別人、「作詞 H.Bonar」と印刷されている楽譜も多くある¹²。

このように、スクライヴンの人生をたどってみると、いろいろなことがわかる。そこから推測すると、この詞の最終的な完成は、二度目の婚約者を失った日より後、つまり1860年以降と思われる¹³。その理由は、1860年以前では、歌詞の三番を書きあげられるような心境にはなかったと推測できるからである（この点については「2 詞の意味」で取り上げる）。そこで「1855年説」にはかなり無理がある。

さらに、「詞の意味内容」と「彼の人生」とを照らしあわせて考えれば、この詞は一時期に書かれたものではなく、ましてや、1860年以前に書かれたとは考えにくい。さらに、そこには三段階あったのではないかと、推測される。つまり「一番は1843年以前、二番は1844-60年の間、三番は1860年以降に作詞された」と推測できる。これが私の仮説である。

一番の歌詞は若い時の力にあふれているので、1843年以前に書かれた。しか

¹¹ Jas. Cleland, op.cit., p.19.

¹² Robert D. Coleman, *The Evangel*, American Baptist Publication Society, Philadelphia, 1909, No.189.

Charles M. Alexander, *Immanuel's Praise*, Fleming H. Revell Company, New York, 1914, No.251. 他多数あり。正確には「B 賛美歌集出版年表」の中で示している。

¹³ 大塚野百合、前掲書、123頁。

し、二番の歌詞は一度目の婚約者の死（1843）後、それを乗り越えられた時に書かれた（1844-1860）ものと思われる。そして、三番の歌詞は二度目の婚約者が亡くなった（1860）後に、書かれた（1864）と考えられる。しかも、アイルランドの母が病気だという知らせを受け、母を慰めるために、手紙にこの詞を添えて送った（1864）という証言もある¹⁴。そこで、その時がこの詞の完成とみなすことができる。自分の人生の歩みと共に育まれた詞が、母へ手紙を書き送った1864年に完結した、ということになる。

スクライヴン自らが、1869年に出版した詩集があるが、その詩集の中には「*What a friend we have in Jesus*」はなく、それに似た詩も存在しない¹⁵。つまり、これは、自らの人生をかけて紡ぎ続けた作品であり、1864年に母に贈るまでは、未完であり、彼には公表の意図がなかったのである。もし通説どおりに「1855年」に完成し、どこかで公表していたとするならば、1869年の自らの詩集に掲載したはずである。

他方、1864年に母と親友サックヴィルの妻に渡した草稿のうちどちらかが、どこかで発表されるに至ったのか、あるいは、64-69年の間に、本人が日曜学校での使用に提供したと思われる。

そこから日曜学校の歌集に載り、コンヴァースがその詞を見つけて、1868-71年の間に曲をつけ、楽譜として印刷された。さらに、当時、福音唱歌歌手として有名であったサンキー¹⁶がその楽譜を見つけ、自分の賛美歌集『*Gospel Hymns No.1*』（1875年）に取り入れた。そこから、この賛美歌が大流行した。これが、この楽譜が「作詞者不詳」、あるいは、1875年以降では「作詞 H.Bonar」と印刷されて広まった経過である。

¹⁴ Jas. Cleland, op.cit., p.13.

¹⁵ Joseph Medlicott Scriven, *Hymns and Other Verses*, Peterborough, 1869. これはスクライヴン自身が出版した詩集である。全112頁からなり、その中に117編の詩が集録されているが、「*What a friend we have in Jesus*」はない。また、序文にも、本文にも内容的に、言葉遣いなど類似した作品や手がかりも見当たらない。

¹⁶ アイラ・サンキー（Ira David Sankey 1840-1908）は音楽伝道者であり、後に福音唱歌の大流行のきっかけを作った。アメリカの大衆伝道者ムーディー（Dwight Lyman Moody 1837-1899）の専属歌手として、全米を巡回した。

A スクライヴン人物史

西暦	年齢	出来事・楽譜
1819	0	アイルランド、ダウン州シーパトリック生まれ
1842	23	ダブリンのトリニティーカレッジ卒業、ミリタリーカレッジで学ぶ
		● 「いつくしみ深き」1 番作詞
1843	24	① 婚約者が結婚式の前日に溺死
1844	25	カナダ、ポートホープへ移住。教師になる。 プリマス・ブレザレン（ジョン・ネルソン・ダービー設立）に所属（ダービーが英国国教会を批判し、庶民への隣人愛の実践を唱えて創設） 隣人愛の奉仕から「ポートホープの良きサマリア人」と呼ばれるようになる
		● 「いつくしみ深き」2 番作詞
1860.8.6	41	② 婚約者エリザ・ローチ・キャサリンが結核で病死（23 歳）
1864	45	● 「いつくしみ深き」3 番作詞 = 全体像完成 「アイルランドの母を慰めるために作った」 （一部を母へ、一部を Ms. サックヴィルへ）
1869	50	Josepf Medlicott Scriven, Hymns and Other Verses, Peterborough, 1869. スクライヴン自身による詩集。 この中には「What a friend we have in Jesus」はない。
1870	51	この詩を見つけたコンヴァースが曲をつけた。（曲の原題は Erie, 1868 年）
1870 ● 楽譜の初出	51	○ Silver Wings; a collection of entirely new Sunday School music, Oliver Ditson & Co.,1870. (作曲 Karl Reden)
1872	53	○ The Voice of Praise, K.Reden and E.T.Bairded.,Thompson Baird,1872. (No.d286, 作詞者不詳, 作曲 K.Reden)
1874	55	○ Book of Hymns and Tunes, Thompson and C.Converse ed., Presbyterian Committee,1874, (No.780, 作詞者不詳, 作曲 Converse 「作曲 1871」)

1875	56	サンキーの『Gospel Hymns No.1』に掲載され大流行
1878		○ C.E. Robinson and T.E. Perkins, Calvary Songs, American Sunday School Union, 1875, No.28.
1880		○ Charles Robinson, A Selection of Spiritual Songs, Scribner & Co., 1878, No.567.
1881		○ Jos. P. Holbrook, Worship in Song: a selection of hymns and tunes for the Service of the Sanctuary, 1880, No.690.
		○ C. Robinson and Robert MacArthur, The Calvary Selection of Spiritual Songs, 1881, No.7.
1886 1886.8.10	67	ジェームズ・サックヴィル家に間借中、重い病気になる。 一人で散歩中、溝に落ちて事故で亡くなる。
1887 ●名前の 初出		死後、サックヴィルが多くの詩の草稿を発見し、出版した。 以降、作詞者名が明記される。 Ira D.Sankey, Gospel Hymns No.5, The John Church Co., 1887. (No.167, 作詞 Joseph Scriven, 作曲 Charles C.Converse)
1895		Jas. Cleland, What a friend we have in Jesus and other hymns by Joseph Scriven, Williamson Publisher, 1895.

2 詞の意味

「What a friend we have in Jesus」の歌詞を、スクライヴンは、一体、いつ、どのような思いで作ったのか。スクライヴンの作った詞を試訳し、人物史と照らし合わせ、考察する。

1 番 23歳の頃（1843年以前）

<i>What a friend we have in Jesus</i>	素晴らしい友、イエス
<i>All our sins and griefs to bear</i>	われらの罪・悲しみを全て負う
<i>What a privilege to carry</i>	素晴らしい特権
<i>Everything to God in prayer</i>	全てを神に祈れることは
<i>Oh what peace we often forfeit</i>	われらしばしば平安を失い
<i>Oh what needless pain we bear</i>	無意味な苦しみに晒される
<i>All because we do not carry</i>	全てを神に委ねて
<i>Everything to God in prayer</i>	祈り尽くさないからだ

2 番 35歳の頃（1844-60年の間）

<i>Have we trials and temptations</i>	世には試練も誘惑も多い
<i>Is there trouble anywhere</i>	どこにでも困難はある
<i>We should never be discouraged</i>	それでもくじけてはいけない
<i>Take it to the Lord in prayer</i>	祈りて主に委ねなさい
<i>Can we find a friend so faithful</i>	世に真実 <small>まこと</small> の友を見つけうるか
<i>Who will all our sorrows share</i>	全ての悲しみを分かち合える方を
<i>Jesus knows our every weakness</i>	イエスはわれらの弱さを知っておられる
<i>Take it to the Lord in prayer</i>	祈りて主に委ねなさい

3 番 45歳の時（1860年以降）

<i>Are we weak and heavy laden</i>	弱さや重荷のゆえに
------------------------------------	-----------

<i>Cumbered with a load of care</i>	いろいろ思い煩 ^{わづら} う時でさえ
<i>Precious Savior, still our refuge</i>	貴き救い主は われらの避け所
<i>Take it to the Lord in prayer</i>	祈りて主に委ねなさい
<i>Do thy friends despise, forsake thee</i>	汝の友に蔑 ^{あは} まれ、見捨てられても
<i>Take it to the Lord in prayer</i>	祈りて主に委ねなさい
<i>In His arms He'll take and shield thee</i>	主は御手に抱き、汝を護る
<i>Thou wilt find a solace there</i>	汝はそこに慰めを見いだす

(城試訳)

詞の語句の分析からその意味内容を考察する。まず、この詞は単純な繰り返しからなるものではなく、一番二番三番と深まっている。一番二番にある「祈りなさい」に対する結論として、三番の最後に「慰めを見出す」とある。全体が、繰り返しではなく、序論・本論・結論という構造になっている。作曲者コンヴァースもこの詞のこの深まりに、魅力を感じ、作曲したと思われる。

しかし残念なことに、現在の日本語訳の多くは¹⁷、原詞のもつこの構造を無視し、結果、存在しない歌詞を繰り返し、三番へと深まるダイナミズムを失い、全体が平板な繰り返しになっている。一番で結論(三番)を先取りしてしまい、「友なるイエス」という主題を強調できたが、反対に「信仰の三つの深まり」を表現できなくなっている。

詳しく詞を分析する。第一に、「祈り」に注目すれば、一番では「祈り尽くさないからだ」「全てを祈れ」と青年期のまっすぐな祈りの強さが表現されている。それが二番では「くじけてはいけない。祈り続けよう」となり、三番では「友に蔑まれても、それでも祈りなさい」と変化している。自分の力による祈りから、自分を励ます祈りへ、さらには自分を神に委ねる祈りへと深まっている

¹⁷ 「多く」と述べたが、『讚美歌 21』(1997年)は1・2・3番の最後の文を原文に近づけて訳出する努力をしている。『聖歌』(1986年)はほぼ正確に原詞の意味を訳出している。

る。

第二に、自力の観点から見れば、一番「頑張ろう」、二番「くじけないで」、三番「御手が護る・主の慰め」へと変化している。信仰が、自力から他力へと深まっていく。一度ではなく、二度の悲劇を味わいながら、そこから癒された守護体験があったからこそ、三番では、神の救いの力への信頼が確信のある言葉となっている。

第三に、一番で「all」「everything」という言葉がそれぞれ二回ずつ用いられ、二番では一回ずつとなり、三番ではなくなる。また、一番では「we」が4回、二番では3回、三番では1回になり、その代わりに、三番では「汝 (thy, thee, thou)」が4回も用いられる。そのうちの3回は「汝」という主からの親しい呼びかけである。つまり、三番は、we という「人間同士のつながり」倫理ではなく、「神と私との関係」信仰の領域に踏み込んでいる。3人称としての「主」と、呼びかけられた「汝」(私) との「我-汝関係」にある。つまり、神の愛は一般論でも理論でもない。「全ての人」や「誰にでも」ではなく、「友なるイエスが、今ここで、苦しむこの私に呼びかけ、私 (汝) と共にいてくださる」という意味になる。スクライヴンにとって慰めの源となった確信がここに表現されている。不思議に、三番の最後の二フレーズのみ古語を用いて表現している。

また、全体を貫くキーワードもある。それが「祈り」である。一番・二番・三番でそれぞれ二回ずつ用いられる。祈りが彼の生涯を貫き、祈りによって信仰がつなぎとめられ、結果、神が共にいて下さるという慰めが、深く実感できるようになった¹⁸。

もう一つ重要なのが「友」という言葉である。イエスがいかなる友なのか、神の慰めの本質について、一・二・三番に描かれ、かつ、その描写が深まっていく。一番「われらの罪・悲しみを担う」、二番「悲しみを分かち合える」、三

¹⁸ A. E. Bailey, *The Gospel in Hymns*, Charles Scribner's Sons, 1950, p.496. ベイリーは「この詩は「祈れ」がたくさん繰り返され上手とはいえない・・・むしろ下手である。しかしその反復が、彼の苦難をあからさまにし、彼の霊的な命に深く気づかせる」と言う。

番「御手に抱いて、護る」と。「素晴らしい友」から「真実の友」へ、さらに「貴き救い主」へ、「友」の形容詞の内容も深まっている。

こうして、彼は人生の二つの悲しい出来事による絶望を、そのつど「祈り」と「友なるイエスによる慰め」によって乗り越えることができた。その救いの過程を体験し、それをその時の自分なりの言葉をもって紡ぎだし、表現して作られたのがこの詞である。最後の二行に至って初めて「主と自分との相互関係」が表現されている。これが彼の人生を通して与えられた結論である。

こうして、詞の内容及びその深まりから、彼の人生の歩み、年齢と共になされた体験に、一・二・三番それぞれが依拠している。それゆえに、三番の心境に至るまで（1864年）、彼はこの作品を公表できなかつたのである。三番が彼の人生の結論であり、それを敢えて古語を用いて表現している。

3 楽譜の変遷

次に、作表B「賛美歌集出版年表」を手がかりに、作詞年・作曲年を考察する。

「1868年、スクライヴィンのこの詩と出会いコンヴァースが曲をつけて、この賛美歌が完成した」¹⁹。そこで、1868年には詞は存在していたと言える。原曲 *Erie* の作曲年は「1868年」であるが²⁰、「*What a friend we have in Jesus*」と合わせた曲としては、1874年に出版された賛美歌集に「作曲 C.Converse 1871年」とある²¹。作曲年についても1868年説から1871年説までであるが、この

¹⁹ 大塚野百合、前掲書、123頁。

コンヴァースは讚美歌集を7冊出版したが、1863年版、1867年版を除き、1870年以降の5冊全てに（1870、1872、1874、1892、1896年版）この曲を採用している。

²⁰ コンヴァース作曲 *Erie* には「作曲1868年」とある。コンヴァースは自ら作曲した *Erie* をベースにして、スクライヴィンの詞にあわせて楽譜を作成した。

²¹ 詞と一緒に印刷された楽譜としては、1874年のものだが、そこに「作曲1871年」とある。*Book of Hymns and Tunes*, Thompson and C.Converse ed., Presbyterian Committee, 1874, No.780.

「1871年」が印刷された証拠である。しかも、この賛美歌集はコンヴァース自身の編集なので、正確である。それゆえ、これが正式の作曲年とも言える。

今回発見した一番古い楽譜は、1870年の『*Silver Wings*』にある。そのタイトルの下に「*Words from the Genevan Presbyterian Church (of Brooklyn) Collection*」と書かれている。それゆえ、詞は、1870年以前に存在したことになる。

そこで、「Genevan Presbyterian Church」を調べると、『*First Church Since 1822*』²²という長老教会の記録誌があり、1860-1868年当時の牧師は Charles S. Robinson である。ロビンソンは、1865年に『*Songs of the Sanctuary*』を、1868年には『*Psalms and Hymns for Christian Worship*』を出版しているが、そのいずれにも「*What a friend*」は掲載されていなかった。

「この詩が日曜学校の歌集 (*Sunday-School Hymns*, in Richmond, Virginia) に載り、たまたまその楽譜を見たサンキーが感動し、1875年に自らの賛美集に入れて、これを印刷することになり、広く人々に知られるようになった」²³とされているが、『*Sunday School Hymns*』(1867)の中にも、楽譜は確認できない。

また、Hastings の賛美歌集 (『*Social Hymns*』1865) に載ったものが初めて印刷された楽譜である²⁴という証言もあるが、これも確認できない。ハステイングの『*Social Hymns*』(1865年)には掲載されていないが、4年後の『*Spiritual Melodies*』(1869)には見つけることができる²⁵。歌詞のみなら『*Precious Hymns*』(1870)、『*Hymns of the Morning*』(1872)に見つけることができる。

サンキーが手にした歌詞は、この内のどれかであったろうと推測される。その際、サンキーの手元にあった歌詞に「H.Bonar」の名が付せられていたので、そのまま印刷され、それが再版を重ねてしまったと考えられる。

²² Rinda Kolts, *First Church Since 1822, A History of the First Presbyterian Church of Brooklyn 1822 to 2003*, p.4.

²³ William Reynolds, *Companion to Baptist Hymnal*, p.238.

『讚美歌略解』日本基督教団讚美歌委員会、1954年、181頁。

²⁴ Armin Haeussler, *The Story of Our Hymns*, Eden Publishing House, 1952, p.475.

²⁵ ただし、タイトルと番号 (d341) は目次で確認できるが、楽譜は確認できない。

「H.Bonar」とは、イングランドの賛美歌作家 Horatius Bonar（1808-1889）のことである。「*What a friend we have in Jesus*」の英語のニュアンスから、当時名の知られたボナーが候補に挙がったと推測される。しかし、この詞とボナーの作品とには、内容的にも用語的にも一致や類似を見いだすことはできない²⁶。サンキーによれば、後にボナー自身の申し出により誤りが発見されたという。修正されたのは、1875年に出版されてから数年後のことである²⁷。

また、ボナー作とされる場合、楽譜が縮小版で印刷され、歌詞が2番までしかなく、3番の歌詞が削除されている場合が多い²⁸。

楽譜には、5つのタイプがある。タイプ①「作詞者不詳・作詞年不詳」、タイプ②「作詞者 H.Bonar・作詞年不詳」、タイプ③「作詞者 Scriven・作詞年不詳」、タイプ④「作詞者 Scriven・作詞年 1855」、タイプ⑤「作詞者 Scriven・作詞年 1855 以外」というバリエーションが見られる。また、作曲者 Karl Reden とは、C.C.Converse の初期のペンネームである。

1882年までは、ほとんどが「作詞 H.Bonar」とあり、ボナーの申し出により誤りが発見されたので、1883年以降「作詞 Anonymous」とする楽譜も少し存在するが、依然「H.Bonar」のままのものも続いて出版され、1922年まで「H.Bonar」とする楽譜が存在する。他方、初めて Scriven の名前が印刷されたのが、1887年の『*Gospel Hymns No.5*』である。

²⁶ H.Bonar の作品は『新生讃美歌』（2011年）では、415番、495番である。

R.H.Baynes, *Lyra Anglicana, Hymns and Sacred Songs*, Houlston & Sons, London, 1875. この本の中で、*H.Bonar* の詩が5つ (No.65, 67, 88, 175, 191) 紹介されている。

²⁷ Ira D.Sankey, *Sankey's Story of the Gospel Hymns*, The Sunday School Times Company, 1906, p.247.

²⁸ 一部別表記の楽譜あり。1番：*Oh* → *O*, *Oh* → *O*, *pain* → *pains*,
3番：*His* → *his*, *He* → *he*, *solace* → *shelter*。歌詞の3番を削除し2番までしかない楽譜、4番を加筆した楽譜も存在する。

B 賛美歌集出版年表

「×」楽譜が掲載されていない

「△」収録されているという証言があるが、楽譜は確認できない。

「○」収録されている

- 1856 : × Sunday School Hymns, American Sunday School Union, 1856.
- 1856 : × J.B.Packard, The Spirit Minstrel: a collection of Hymns and Music, Boston, Bela Marsh, 1856ver. × , 1857ver. × , 1860ver. × . (各版にも確認できず)
- 1859 : × A.S.Jenks, Devotional Melodies, A.S.Jenks, 1859.
- 1860 : × J.W.Dadmun, The Melodeon, J.P.Magee, 1860.
- 1863 : × C.C.Converse, The Sweet singer: a collection of hymns and tunes, 1863.
- 1865 : △ H.L.Hastings, Social Hymns Original and Selected, Virginia, 1865.
(確認できず)
- 1865 : × Charles S. Robinson, Songs for the Sanctuary, 1865.
- 1866 : △ Psalms and Hymns for the Worship of God, Presbyterian Committee, Richmond, 1866ver. × , 1867ver. × . (それぞれの版でも確認できず)
- 1867 : × C.C.Converse, Children's Praise, 1867.
- 1867 : △ Sunday School Hymns, General Protestant Episcopal Sunday School Union, 1867.
-
- 1868 : × 原題 Erie, 作曲 C.C.Converse.
- 1868 : × Charles S. Robinson, Psalms and Hymns for Christian Worship, 1868.
- 1869 : × Josef Medicott Scriven, Hymns and Other Verses, Peterborough, 1869.
スクライヴンによる詩集。この中に「What a friend we have in Jesus」
はない
-

- 1869 : △ Spiritual Melodies, I.K.Lombard, H.L.Hastings, 1869.
1869ver. (No.d341) × , 1870ver. (d402,403) × (楽譜を確認できず)
- 1870 : ○ Silver Wings: a collection of entirely new Sunday school music,
Oliver Ditson & Co., 1870.
(No.98, 作詞者不詳／作曲 Karl Reden)
- 1871 : ○ Hymns for use in Sunday School, H.J.Grasett ed., Humter Rose & Co.,
1871. (No.d50)
- 1872 : ○ The Voice of Praise, K.Reden and E.T.Baird ed., Thompson Baird,
1872. (No.d286, 作詞者不詳／作曲 K.Reden)
- 1872 : ○ Hymns of the Morning, Charles C.Baker, Charles W.Sargent, 1872.
(歌詞のみ, No.139, 作詞者不詳)
- 1872 : × Sweet Spices for Sunday School, W.H.Bonar & Co., 1872.
(Bonar 自身の歌集。ここには所収されていない)
- 1873 : ○ The Devotional Chimes, Asa Hull, Asa Hull, 1873.
(No.28, 作詞者不詳／作曲 Karl Reden)
- 1874 : ○ Book of Hymns and Tunes, E.Thompson and C.Converse ed., Presby-
terian Committee, 1874.
(No.780, 作詞者不詳／作曲 Converse 「作曲 1871」)
- 1875 : ○ Ira D.Sankey, Gospel Hymns and Sacred Songs, 1875.
(No.29, Bonar / Converse)
- 1875 : ○ C.E. Robinson and T.E. Perkins, Calvary Songs, American Sunday
School Union, 1875. (No.28, Bonar / Reden)
- 1876 : ○ Ira D. Sankey, Gospel Hymns No.2, 1876.
(No.57, Bonar)
- 1878 : ○ Charles Robinson, A Selection of Spiritual Songs, Scribner & Co., 1878.
(No.567, Bonar / Converse)
- 1880 : ○ Jos. P. Holbrook, Worship in Song: a selection of hymns and tunes for
the Service of the Sanctuary, 1880.

(No.690, Bonar /作曲 Holbrook / 2 番)

1881 : ○ Charles Robinson and Robert MacArthur, The Calvary Selection of Spiritual Songs, 1881, (No.7, Bonar / Converse / 2 番)

1887 : ○ Ira D.Sankey, Gospel Hymns No.5, The John Church Co., 1887.

(No.167, 作詞 Joseph Scriven, 作曲 Charles C.Converse)

1892 : ○ Songs of the Covenant, C.Converse ed., Presbyterian Committee, 1892.

(No.1, 作詞者不詳 /作曲 Converse)

4 結論

以上の3つの考察をつきあわせて考えると、この詞は一時期に完成したものではないと思われる。この詞はスクライヴン自身の人生の歩みと共に紡がれ続けた詩である。1860年以降、まとめられ、最終的には、母親への手紙に添えられ、1864年自らの手を離れた時点が「完成・公表」と考えられる。それゆえ、完成版は「作詞 1864年」「作曲 1871年」と考えるのが、もっとも蓋然性が高いといえる。これがこの小論の結論である。

故郷にいる母親を慰めるために手紙を書き、それにこの詞を添えた。その詞のコピーをサックヴィル夫人にも渡したという証言もある²⁹。こうしてスクライヴンの手を離れ、完成した。というより、この詞自身が自らを啓示（公表）したのではないか。

最愛の人の死や自分にふりかかる運命を、私たちは自分ではどうすることもできない。それゆえにこそ、イエスがいて下さる。しかも、イエスは、全ての問題を解決し、私たちの前からその困難や絶望を取り除いてくれるのではなく、その苦しみの中でも私たちと共にいて下さる。人生に伴なり、一緒に歩んで下さる。これが、スクライヴンが自らの人生をもって体験した「友なるイエスに

²⁹ Jas Cleland, op. cit., p.13.

よる慰め」である。

スクライヴンは、自分の身に起きた二度の絶望の体験とそのつどのイエスによる慰めの体験を、詞に託して紡ぎ続けた。彼は、祈り続けることによって、絶望と思える自らの人生の中に、神の「深い慈しみ」の具体的な姿を「友なるイエス」として見いだした。

人間が関与できないところで、神は最も弱くされた人、苦しんでいる人に伴うことをスクライヴン自身が自らの人生をもって体感したのである。それゆえ、それは彼の創作ではない。

また、日本語の題名については、「みのうさつらさも」(『譜附 基督教聖歌集』1886年)が一番古く、『聖歌』(1958年)は、冒頭の句をとって「つみとがをにのう」としている。讚美歌委員会が「いつくしみ深き」(『讚美歌』(1931年))と内容から意識したのは、正しかったと言える。中田羽後編『リヴァイヴァル聖歌』(1932年)ではタイトルを「我等の友なる主」としている。これがタイトルと詞の内容とにおいて原作に一番近い題名といえる³⁰。

謝辞

この稚拙な小論文を査読して下さった松見俊教授(西南学院大学)と、詳細に吟味し、丁寧にご指導下さった青野詔子先生に感謝申し上げます。また、今回の調査のために用いた資料は、C.K. ドージャー先生が、神学部のために遺して下さった多くの文献(ドージャー文庫)に基づくものであることも、感謝の意をもって付記しておきたい。

³⁰ 中田羽後編『リヴァイヴァル聖歌』ホーリネス教会出版、1932年。

5 引用・参考文献一覧

単行本

- 『讚美歌略解』日本基督教団讚美歌委員会，1954年。
- 『讚美歌21略解』日本基督教団出版局，1998年。
- 井上武士『日本唱歌全集』音楽之友社，1976年。
- 大塚野百合『賛美歌・聖歌ものがたり』創元社，1996年。
- 佐藤裕『聖歌の友』聖公会出版，1986年。
- 安田寛『唱歌と十字架』音楽之友社，1993年。
- T.M. マクネヤ，別所梅之助『改訂 讚美歌物語』警醒社，1938年。
- Albert Edward Bailey, *The Gospel in Hymns*, Charles Scribner's Sons, New York, 1950.
- R.H.Baynes, *Lyra Anglicana Hymns and Sacred Songs*, Houlston & Sons, London, 1875.
- Elizabeth Hubbard Bonsall, *Famous Hymns*, The Union Press, Philadelphia, 1923.
- Jas. Cleland, *What a friend we have in Jesus and other hymns by Joseph Scriven*, Williamson Publisher, 1895.
- Earnest K. Emurian, *Living Stories of Famous Hymns*, Baker Book House, 1955.
- Armin Haeussler, *The Story of Our Hymns*, Eden Publishing House, Saint Louis, 1952.
- H.L.Hastings, *Original and Selected Social Hymns*, Virginia, 2. ver., 1865.
- Phil Kerr, *Music in Evangelism and Stories of Famous Christian Songs*, Gospel Music Publishers, California, no. data., p.182.
- Kenneth W. Osbeck, *101 Hymn Stories*, Kregel Publications, 1995.
- J.B.Packard, *The Spirit Minstrel, Collection of Hymns and Music*, Boston, 1857.
- Carl F. Price, *One Hundred and One Hymn Stories*, The Abingdon Press, New York, 1923.
- William J. Reynolds, *Companion to Baptist Hymnal*, Broadman Press, Nashville, 1976.
- Ira D. Sankey, *Sankey's Story of the Gospel Hymns*, The Sunday School Times Company, 1906.
- Joseph Medlicott Scriven, *Hymns and Other Verses*, Peterborough, 1869.

日本語楽譜（年代順）

- 『譜附 基督教聖歌集』美以美教会雑書会社，1886年，
No.136「みのうさつらさも」。
- 『譜附 基督教聖歌集』メソジスト出版舎，1893年，
No.235「みのうさつらさも」。(別の曲・詞 No.86「いつくしみにに」がある)
- 『基督教讚美歌』米国浸礼教会伝道会社出版，1896年，
No.241「なさけの友なる主」。

- 『縮刷 讚美歌 第一編』讚美歌委員, 1914年,
No.243「たふときわが友」。
- The Hymnal No.1*, A Union Committee, Kyobunkwan and Keiseisyua, 1915,
No.243「たふときわが友」。
- 『讚美歌 第一編』讚美歌委員, 1924年, 10版,
No.243「たふときわが友」。(別の曲・詞 No.223「いつくしみふかき」がある)
- 『讚美歌』讚美歌委員会(別所梅之助ら), 1931年,
No.539「いつくしみふかき(ともなるイエスは)」。(No.274「いつくしみふかき(しゅのてにひかれて)」)
- (『讚美歌』日本基督教団讚美歌委員会, 1951年, No.539「いつくしみふかき」)
- 『リヴァイヴアル聖歌』ホーリネス教会出版, 1932年,
No.201「我等の友なる主」。
- 『福音讚美歌』Fisher Corporation LTD., Hawaii, 1947年,
No.149「*What a Friend*」。
- 『讚美歌』日本基督教団, 1954年, No.312「いつくしみ深き」。
- 『聖歌』日本福音連盟, 1958年, No.607「つみとがをにのう」。
- 『讚美歌・讚美歌第二編』日本基督教出版局, 1981年,
No.312「いつくしみ深き」。
- 『讚美歌 21』日本基督教団出版局, 1997年, No.493「いつくしみ深い」。
- 『新生讚美歌』日本バプテスト連盟新生讚美歌編集委員会, 2003年,
No.431「いつくしみ深き」。

英語楽譜(年代順)

- 1868 : 原題 Erie, 作曲 Converse. (曲のみ)
- 1870 : Silver Wings; a collection of entirely new Sunday School music,
Oliver Ditson & Co., 1870. (No.98)
- 1872 : The Voice of Praise, K.Reden and E.T.Baird ed., Thompson Baird,
1872. (No.d286)
- 1873 : The Devotional Chimes, Asa Hull, Asa Hull, 1873. (No.28)
- 1874 : Book of Hymns and Tunes, Thompson and C.Converse ed.,
Presbyterian Committee, 1874. (No.780)
- 1875 : C.E. Robinson and T.E. Perkins, Calvary Songs, American Sunday School
Union, 1875. (No.28)
- 1878 : Charles Robinson, A Selection of Spiritual Songs, Scribner & Co., 1878.
(No.567)
- 1880 : Jos. P. Holbrook, Worship in Song: a selection of hymns and tunes for the
Service of the Sanctuary, 1880. (No.690)
- 1881 : Charles Robinson and Robert MacArthur, The Calvary Selection of Spiritual
Songs, 1881. (No.7)
- 1887 : Ira D.Sankey, Gospel Hymns No.5, The John Church Co., 1887.
(No.167, 作詞 Joseph Scriven, 作曲 Charles C.Converse)

- 1892 : Songs of the Covenant, C.Converse ed., Presbyterian Committee, 1892.
(No.1)
- 1902 : The Primary Sunday-school Hymnal, Rufus W. Miller, The Heidelberg Press,
Philadelphia, 1902. (No.235, 詩のみ)
- 1904 : The Baptist Hymn and Praise Book, Lansing Burrows, Sunday School Board
Southern Baptist Convention, Nashville, 1904. (No.355)
- 1909 : The Evangel, Robert D. Coleman, American Baptist Publication Society,
Philadelphia, 1909. (No.189)
- 1910 : Student Volunteer Hymnal, Sixth International Convention, Rochester,
New York, 1910. (No.66, 詩のみ楽譜なし)
- 1910 : Coronation Hymns, E.O.Excell, E.O.Excell Publisher, Chicago, 1910.
(No.265)
- 1914 : Immanuel's Praise, Charles M. Alexander, Fleming H. Revell Company,
New York, 1914. (No.251)
- 1916 : Praiseworthy for the Church and Sunday School, E.O.Excell, E.O.Excell
Publisher, Chicago, 1916. (No.209)
- 1921 : Tabernacle Hymns No.2, Tabernacle Publishing Company, Chicago,
1921. (No.331)
- 1922 : The New Church Hymnal for Churches and Mission Schools, F.L.C.,
Kyobunkwan, Tokyo, 16ed., 1922. (No.114)
- 1922 : Victorious Praise, Sunday School Board Southern Baptist Convention,
Nashville, 1922. (No.62)
- 1923 : Golden Bells, Homer A.Rodeheaver, The Rodeheaver Company, Chicago,
1923. (No.51)
- 1926 : Quartets for Men, Daniel Protheroe, The Rodeheaver Company, Chicago,
1926. (No.140)
- 1926 : Eigo Sambika The Hymnal, Koseikaku, Tokyo, 1926. (No.68)
- 1928 : One Hundred English Hymns, L.C.M. Smythe, Christian Literature Society of
Japan, Tokyo, 1928. (No.91)
- 1933 : Baptist Church Hymnal, Psalms and Hymns Trust, London, 1933. (No.591)
- 1937 : Hymns in English, F.D. Gealy, Christian Literature Society of Japan,
Kyobunkwan, Tokyo, 1937. (No.95)
- 1938 : The Sunday School Hymnary, Carey Bonner, The National Sunday School
Union, London, 1938. (No.528)
- 1942 : Song and Service Book for Ship and Field, Army and Navy,
A.S. Barnes and Company, New York, 1942. (No.97)
- 1942 : The Hymnal Army and Navy, Ivan L.Bennet, U.S. Government Printing
Office, Washington, 1942. (No.319 (97))
- 1947 : 福音讃美歌, Fisher Corporation LTD., Hawaii, 1947. (No.149)
- No Year : Spiritual Life Songs, Harry P. Armstrong, Abingdon Cokesbury Press,
New York, no year. (No.109)

賛美歌『いつくしみ深き』の作詞年

参照 インターネット
www.hymnary.org
www.cyberhymnal.org

